高校教育資料

＜ＥＳＤ＞

持続可能な社会の担い手としての生徒を育てるＥＳＤの実践

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　愛知県立豊田東高等学校　山本　徳子

はじめに

ＥＳＤ（Education for Sustainable Development）「持続可能な開発のための教育」は，現代社会の課題（環境，貧困，人権，平和，開発等）を自らの問題として捉え，身近なところから取り組むことにより，それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと，そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動である。その対象は，環境，経済，社会，文化など多岐に及んでおり，さまざまな側面から学際的かつ総合的に取り組むことが重要である。

　　平成19年度に総合学科として改編された本校では，その特徴を生かしたＥＳＤ活動を進めている。これまでに，ＥＳＤの対象となる様々な課題への取組をベースにしつつ，「環境教育」，「国際理解教育」，「地域連携教育」の三つを柱として，持続可能な社会を創る市民を育てる教育活動を実践する中で，社会における諸問題に注目し,それを解決することができる人材育成に取り組んできた。本稿では，これらの活動実践を紹介する。

１　環境教育からのアプローチ～さまざまな立場の意見を知る～

本校では，学校の横を流れる矢作川やその流域にある里山等をフィールドとして「産業社会と人間」や「理科」を柱として環境についての教育を行っている。本稿では夏休み中に実施した，希望者対象の理科の特別講座「獣害について考える」を紹介する。

　(1) 生徒の活動

本校が立地する豊田市の山間部では，イノシシやシカによる農作物の食害を中心とした獣害が問題となっている。生徒たちに，人間の活動と自然との関わりを考えさせるために適切な事例だと考え，環境教育の題材とすることにした。

ア　現地調査と課題発見

　　　　　まず，獣害問題を知るために，現地調査

を行い，里山生態系について学んだ。当初

は獣害という言葉からイノシシやシカを人

の暮らしに対する脅威だととらえる生徒が

多かったが，農業総合試験場や農家で話を

聴くことで，被害の実態を知るとともに，

イノシシが増えた背景には人間の活動によ

る森林の荒廃があることを学んだ。この活

写真１　獣害対策の話し合い

動の中で，人間の生活と自然保護との両立

に課題があることが分かったため，生徒に感じたことや考えたことを話し合わせ，課題解決の道を探ることにした（写真１）。

イ　課題解決への取組

環境教育では多面的な思考を促す指導を行っている。現地でいろいろな立場の人々の話を聴くことにより，農家の人々の獣害対策の苦労などを知り，それを踏まえて生徒どうしの意見交換を行った。その際，ＫＪ法を用いて，生徒たちにカードに意見を記入させてグループ内で提示することにより，意見を整理させた。

生後間もないイノシシがわなにかかって，檻の中で不安そうに動き回る姿を見たことにより，駆除される動物の立場を意識した意見をもつ生徒や，イノシシによる食害から地域や世界の食料問題に視点を広げて考える生徒も現れるなど，生徒たちは，人と自然との共生を図る手段を考えたいという意欲をもつようになった。

(2) 活動の成果

身近な環境問題を題材とすることで，生徒間で共通の課題意識が芽生え，さらに，現地調査により多面的な考え方を身に付けることができた。こうした取組は，自然との共生や持続可能な社会づくりを考えて，対策を模索し続けることのできる人間の育成につながっていくと思われる。

生徒の感想

今日の実習で，獣害対策の大変さを身をもって感じることができました。私は高校一年生のときに，生物の授業で学んだときには，身近な問題と考えることができませんでしたが，実際に目で見て農家の方の話を聴き，いろいろな人やイノシシの立場に立って考えることができました。私は獣害対策や環境問題に関する仕事をしたいと思っています。今日勉強したことでその思いが強くなりました。私たちが今できることを常に考えて生活することが必要だと思いました。

２　国際理解教育からのアプローチ～グローバルな視点を身に付ける～

(1) 生徒の活動

本校は，例年，修学旅行を利用してマレーシアのチェラス校を訪問し，文化交流を行っている（写真２）。また，姉妹校であるオーストラリアのパスコベール女子高校とは，隔年で相互訪問を実施し，ホームステイやメール交換による交流を定期的に行っている。本校では，これらの交流活動以外にも海外の高校を訪問するなど，海外と活発に交流し，国際理解面でのＥＳＤについても研究が進んでいる。生徒は他国の生徒と触れあうことで，日本とは異なる文化について理解を深めるとともに，異なる文化圏に生活する人と共生する手立てを考える姿勢を身に付けつつある。

ア　外国の人々との交流活動

本校は，修学旅行などで海外の学校を訪問したときや，外国の人々が本校を訪れた時を利用して，文化交流を行っている。

イ　異文化理解の取組

本校では，英語の授業時間に日本文化について英語で発表を行い，交流活動で日本文化を紹介する際の基礎的な能力を養っている。

写真２　チェラス校との文化交流

当初は海外交流の中で日本文化を説明しよう

としても，一方的な説明にとどまり，自分たちの説明を十分に理解してもらえないケースもしばしば見られた。このような中，パスコベール女子高校の生徒から「オーストラリアと日本の文化の違いは何か」と質問されたことをきっかけにして，多くの生徒が，日本の文化だけではなく，相手国の文化を知ることの重要性に気付き，その後のコミュニケーションが活発になっていった。

(2) 活動の成果

現在では，生徒が交流活動を通じて積極的に互いの文化への理解を深めようとしたり，相手に話しかけようとしたりする様子が自然に見られるようになってきた。考え方や文化の異なる人たちとの交流は，本校のＥＳＤの柱のひとつとして定着し，生徒たちの意欲や行動力を高める機会となっている。

また，海外の人々と直接コミュニケーションをとることにより，互いの文化的背景を理解し合うことは，自国の文化について再認識するよい機会にもなっている。

生徒の感想

オーストラリアの人々は，多民族，多宗教国家の中で自分の文化を大切にし，また異文化に対して敬意を持って接していました。ホストファミリーとの交流を通して，相手を理解したり，自分と違う何か新しいことを受け入れるということのすばらしさを知りました。そして，日本の文化の良さに気付き，日本文化を世界に広めたいと思いました。

３　地域連携教育からのアプローチ～社会貢献活動を実践する～

(1) 生徒の活動

****本校では，豊田市山間部において，道の駅と連携してイノシシの肉を利用した商品を開発して販売している。また，豊田市中心部にある商店街との地域連携事業に参画し地域貢献活動に励んでおり，保育士を志望する生徒が，地域の子ども達に自作の紙芝居を読み聞かせたり（写真３），家庭部の生徒が，模擬店を出店したりするなど地域の方々とのふれあい活動を行ってきた。

写真３　紙芝居の様子

生徒たちは，自分たちの学びの成果を発表する

中で，地域の方々から感謝の言葉を受けたり，子どもたちの笑顔に触れたりすることで，今まで以上に自発的に活動に取り組もうとする意欲を高めることができた。

ア　地域に根ざした実践活動

獣害で問題となっているイノシシの肉を利用した商品開発では，調理士や栄養士を目指し，環境教育の特別講座を体験した生徒が，地元のきくいもパスタや梨などに加えてイノシシ肉を素材として利用することを考えた。生徒たちは，授業で学んだ調理方法を活用し，試行錯誤を繰り返しながらもたいへん活き活きと納得のいくまで料理を工夫していた。

　イ　ディスカッション

この地域連携による商品開発では，生徒たちの活発なディスカッションが大きな特徴となっている。調理室では，「もっと～を入れよう」「～した方が良いのでは」といった声が飛び交うなど，生徒どうしで自由にアイデアを出しあいながら，創意工夫を凝らした食品開発を行っている。生徒たちは，「よりおいしくなるように工夫するのが楽しい」と話すなど，地域の方の喜ぶ姿を思い浮かべながら研究に取り組んでいる。こうして，生徒の若い柔軟な発想によって研究されたイノシシなどの創作料理は地元のレストランや商店で新メニューとして取り入れられ，高い評価を得ている。

(2) 活動の成果

　　　地域連携教育は，総合学科の特色ある科目を選択している生徒たちが，授業で学んだことを実践する場となっている。学びを活かして，地域に貢献し，地域の人々に喜んでもらえることが，生徒にとっても喜びであり，今後の活動へのエネルギー源となっている。地域の人々との交流をきっかけに，将来，地域の人々の健康に携わる職業を希望するなど，生徒の進路選択にも影響している。

特にイノシシ肉の利用については環境教育での学びが活かされており，自然と共生することは，決して人が自然に手を加えないということではなく，野生生物を自然の恵みとして認識した上で，食材としての利用を図るなど，バランスよく自然を活用していくことが大切であるということが理解できるようになった。地域連携教育は，身近なところから始めることのできるＥＳＤである。

生徒の感想

地元の材料を使って，料理をするのは楽しかったです。特に，もっとおいしい料理になるように工夫するために，みんなと意見を出し合うことが本当に楽しいと思いました。イノシシを食べることも最初は抵抗があったけど，自分たちの工夫でおいしく調理できたと思います。私たちがイノシシを食べることで，自然のバランスも保たれるのだと思うと，一生懸命調理してよかったと思います。　　　

４　本校ＥＳＤの成果と課題

ＥＳＤは「持続可能な」という日本語訳から，環境面が大きく取り上げられることが多い。しかし,ＥＳＤは環境だけでなく，経済や文化など数多くの視点から現代社会が享受しているさまざまな恩恵を未来社会へつなげていくための教育である。

　本校のＥＳＤの評価にあたり，これらのＥＳＤの観点に基づくアンケートを，研究の初期，後期に全生徒に対して実施し，結果の変化を考察した。アンケート結果の一部を以下に示す。

Ｑ２　環境問題，国際問題，地域問題を乗り越えるために，ボランティア活動などに積極的に参加してみたい。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 初期 | 後期 |
| そう思う | 74.9％ | 84.3％ |
| 思わない | 25.1％ | 15.7％ |

Ｑ１　環境問題，国際問題，地域問題を乗り越えていくためには，さまざまな価値観をもつ人たちに自分の気持ちや考えを伝えるとともに，他者の気持ちや考えを尊重する「交流」が大切である。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 初期 | 後期 |
| そう思う | 92.5％ | 97.2％ |
| 思わない | 7.5％ | 2.8％ |

上記のアンケート結果に加えて，日頃の生徒の言動などから，交流の大切さや今後の活動について肯定的な展望・意見が増加していることが分かった。校外に出かけて現実の問題を直視し，その解決のために生徒どうしや地域の専門家を交えた議論を重ねることが有効であったと思われる。活動の実践にあたって地域の人々，企業や大学で働く人々，海外の人々と実際に交流する機会を豊富に設けてきた成果と言える。

生徒はさまざまな立場の人々や，さまざまな考えを持つ人々とのコミュニケーションを通して，自分を知り，他者を知り，相手を思いやり，多面的に考える力を身に付け，さらには積極的に課題解決に取り組もうとする姿勢を身に付けることができたと考える。

おわりに

「環境教育」，「国際理解教育」，「地域連携教育」の三つの実践は，本来，個別の分野にとどまらず，それぞれがつながって相互に関連し合っているものである。生徒は，これらの活動を通して，自分たちの将来を考え，自分たちが今取り組んでいる活動の一つ一つが持続可能な社会を創る活動へとつながっていることを理解することができた。このことは，将来も継続して自分と地域の環境を考え，持続可能な社会の担い手として生きていくことができる人間を育成するＥＳＤの目的にかなうものである。

今後も本校で今まで行ってきた取組を継続していくことにより，これからの将来を考え，社会に貢献できる生徒の育成に努めていくとともに，ＥＳＤの取組を周辺の地域や学校に普及していきたい。